



タレント / 大川興業総裁

大川 豊さん

ご自身を始め異色のお笑いタレントを輩出している芸能事務所「大川興業」の大川豊総裁にお話を伺いました。メディアへの思い、司法のこと、政治のことなど色々なタブーに切り込んで楽しく興味深いお話を聞かせてもらいました。

(聞き手・構成：高橋辰三，神原あゆみ)

— 以前、本誌のインタビュー（LIBRA2013年2月号）で裁判傍聴で有名な御社所属の阿曾山大噴火さんに出ただいたときに裁判の傍聴に行き始めたきっかけが、大川総裁からオウムの裁判の傍聴の整理券配布に並べと言われたことだと伺いました。

そうですね。でも、そのときはほかにも新人がいっぱい並んでいたんですよ。なぜか阿曾を連れていきました。まさかあんなにはまるなんて思わなかったですね。

あの裁判を傍聴していたら、いきなり麻原がこっちを向いてきましたね。僕と阿曾が一番前の席に座っていて、あいつを信者と間違えたようですね。阿曾が坊主頭でトレーナーの上下を着ていたのですが、そのときには裁判所のチェックがものすごく、荷物チェックをされてノートと鉛筆しか持てなかったです。

— 裁判所からも、これは危ないぞと見られたということですか。

あの当時は厳しかったですね。ほかの人はシャープペンとかは大丈夫なんですけど、なぜか俺だけ鉛筆なんです。

— 大川総裁も坊主だったんですか。

いやいやいや、普通に角刈りで行ったんですけど。

そうしたら麻原がこっちを向いてきて、パードンと言ってきたんです。

— パードン？

パードンと言われて英語だなと思ったので、それはノー・プロブレムと答えたんです（笑）。そしたら監視の人が近寄ってきて私語厳禁ですと言われ、「いや、話し掛けられたから答えたんだよ」という、確かそれが最初だったような気がするんですけどね。

そのオウムに関しては、やっぱり日本でもこれからカルト問題の時代が来るんじゃないかなというふうに思っていたので、江頭2:50とかのメンバーを空中浮遊させてました。もし、こっちの方が高く跳べれば確実に洗脳外しになると思ひまして。

— カルトからの被害救済の活動をされる弁護士がいますけど、大川興業も芸人さんをオウムに潜入レポートさせたのですか。

潜入というわけじゃないですけど、とにかく勝ってこいと言って。そうしたら、我々が本当に高く跳べてしまって大変だったらしいですよ、あいつらこそ正大師だみたいな感じになってしまい。

— なるほど。頭角を現してしまっただけですね。大川さんが

芸人を志したというか、なったきっかけというのは？

いや、分からないですね。一番分かりやすいのは、就職153社落ちたのがいいきっかけだったかなという気はしますね。

よもや、こんなに就職で失敗するとは思ってもいなかったのです。昔は今と違って、1社ずつ手当り次第に回っていました。当時は金融が自由化になるといわれていて、そうすると垣根がないから銀行であっても証券をやるという流れで、消費者金融まで回りました。その当時から三井住友、第一勧業、太陽神戸三井とか、そういう銀行の『寿限無』的なネタもやっていましたね。

——大川さんは、他の芸人さんが取り上げないようなネタをあえて選んでいるような印象を受けます。

テレビで基本的にオンエアできないのは、事務所がまず止めます。企業ネタとか。テレビなんてどうせ許認可事業でしょう。だから、あの枠の範囲以内でしかネタはできない。でも、そうなると、とてもじゃないですけど、カルトとかに勝てないですよ……。

——政治ネタで北朝鮮のこと等について取り上げられていますけれども、怖い目に遭ったことはありますか。

結局ないですよ。銀座数寄屋橋で大日本愛国党の赤尾総裁の演説をしている前でパフォーマンスもやって、それがテレビの深夜番組でオンエアされて、ネタ的には右翼の抗議があったと言われてはいますが、実質的には何にもない。

やっぱり我々の場合は、お笑いって、誰かをバカにするのではなく、愛情だと思っているので、愛国党赤尾総裁の演説の前でやったときも、基本はやっぱり演説を聴いてましたし。

——最近では、政府からテレビ局に干渉が入ったりとか、そういう話題が出てきているように思えるんですけども、感じられていることってありますか。

政府にしても政治家にしてもテレビ局にしても大変弱くなりましたよね。昔の方がよっぽど、田中角栄さんもですが、もうめっちゃくちゃ叩かれたと思いますけどね。

だから何であんなことに、メディアに介入するのかなという感じが、「そんな弱いのか、お前らは」という感じがあります。もっと堂々とやっていたらいいじゃないですか。国民の信託を受けて国会議員になっているんだから、それぐらいは別に。今は、ほかにもメディアが山のようにあるじゃないですか。そこで、堂々とやったらいいじゃないですかね。

——ほかのメディアというようなお話も出てきていますが、今は民放のテレビ局、NHK以外でも動画配信とかネットテレビとかいろいろな媒体が出てきています。そういう動きについてどうお考えですか。

僕はもともと阿曾を裁判に連れていったのも、やはり司法を国民の手に取り戻さなければ、ということがあり、あと映像も我々のものに取り戻さなければいけないというか、文化もですね、政治も含めて、そういう考えがあります。

——司法を国民の手に取り戻すという意識で裁判を見られて、ここは問題だと思われるところってどういうところですか。

何か分かりやすく言うと、オウム裁判とかでお金の流れが分からなかったです。

お金の流れというのは一番肝心だと思っています。お金の流れが分からないと力関係が分からないんじゃないかなと思ったのに、一切出てこなかったですね。かなり見に行きましたけど、誰が決定権を持っていたのかとか、そういうのをすごく知りたかったですね。

——芸能界でもう30年以上されていて、変化を感じる場所はありますか。

ネットになって自由になるかなと思ったら、もっと息苦しい感じがありますね。ちょっとでも失言すると、もうそれがネット上に上がったとか、好きなことが言えない状況になってきていますよね、ライブできえもね。かわいそうですよ。だから、うちだけです、本当にほかの事務所の芸人もライブに受け入れて、事務所がだめだというネタもどんどんやりなさいと言っているのは。

—— 芸能活動を続けてこられてきて、芸能界もしくはこの仕事の好きなどころ、嫌いなどころはありますか。

この職業は本当にありがたいなと思いますね。一番ロボットやAI（人工知能）とかにできないところかなというふうには思っています。ただ、いつかはそれができるようになって、そういうロボットを相方にしようということも考えているので、何とも言えないんですけど。逆にロボットやAIが我々に面白いことを言うてくる時代も来るかなというふうにも思っていますね。

—— メディアへの発信という意味では、大川興業は何かもくろみとか目指しているというところはあるですか。

そうですね。江頭が唯一たぶん世界的に通用する芸人ではないかなと思っているので、また宇宙に行かせて、全裸で踊らせるとか。モザイクも入れなきゃいけないでしょうけど、何かそういうこととかはやりたいですよ。

—— ちなみに、江頭さんとの出会いというのは？

普通に新人として入ってきましたね。うちのオーディションとか新人で来る人って、もう本当にすごかったですよ。バレエのダンサーとか本格的な人ですよ。いや、うちじゃなくて、あなたはニューヨークへ行った方がいいんじゃないかという人とか。あと、宇宙人を呼べる人とか本当にもう幅広く（笑）。

—— その宇宙人を呼べる方は、採用されたんですか。

いや、どこかに行かれてしまいました。採用も結局しないで、宇宙人を呼べたとか言って満足してお帰りになりました。うちは基本、お笑いに聖域がないので何でもオーケーですよ。極端に言えば、もう舞台とかテレビだけでなく、都市開発にもお笑いがあるのもいいし、政治でお笑いがあるのもいいと思っていますので何でもありですね。今は3Dプリンター芸人を募集しているとか、ネタ的には言っていますね。

ドローン芸人も募集していると言ったら、あんなことが起きるしね。引きこもりや不登校もうちは受け入れるので、不登校だった子なんかは表に出るのがやっぱり苦手だったりするので、じゃあ、出なくていいと

言って、一切舞台に出ない、相手に対して客席から声掛けるだけのコンビもいますよ。野球とかプロレスの掛け声やヤジみたいな感じで、本人もやっぴりすごい人気が出たんですけど、やっぱり人を応援するのが好きだということが分かってきたので、だから今は作業療法士の国家資格を取って、そちらでお笑いをいかしていますね。

—— 先ほどヤジというお話がありましたが、このところ国会とか議会のヤジというのが問題になっていて、あの辺ってお笑いの要素というのもあると思うんですね。

そう、笑いが取れないからだめなんですよ。

俺から言わせると、まったくセンスがないですね（笑）。ヤジも劣化していますよね。笑いを取るという前提がないし、国民に分かりやすく政治を伝えるという努力を一切していないですね。ヤジで何かを伝えようとしている人は、必ず演説も面白いんです。

そうじゃない人は、ヤジを本当は自分のために言っているんでしょう。だから、だめですよ。普通ならそれがきっかけで、せめて待機児童問題についてもっと議論が広がるとか論戦になればいいのに、違うところに行っちゃって、まったく広がらないですよ。

—— 海外に行かれることが多いと聞きました。

そうですね。今は東日本大震災の復興支援をずっとやっているんで、行けなくなっていますけど。イラクとか北朝鮮、ヨーロッパにも行ったりしています。大統領選があって、アメリカの大統領選も行ったりしているんで。

そのときにも交流もできて、復興支援では海外からもいろいろな支援物資をいただいたりとかしています。

—— 江頭さんが被災地に頻繁に行かれていたというのは、話題になりましたね。

そうですね。大川興業にはもともと阪神淡路大震災で被災した若手がいたので、新潟の2つの地震も実はこっそり復興支援に行っていて、地震活動期に入ったなというのがありますね。東日本大震災での支援で、江頭が、服を着ているとバレるというのがよく分かり

ました。やっぱり服を着ている江頭ってインパクトがあるんだなと如実に分かりましたね。本人は「自分じゃない」と言ってますけど。

— 選挙の候補者にたくさんインタビューされて「YouTube」でも流していますけれども、選挙の候補者とか、政治家の方の話を聞くとときに何か意識されていることはありますか。

普通のばかなお笑い芸人の立場として、素直に聞かれています。ただ、なるべく例えば自民党の有力な議員だけじゃなくて、メディアが取り上げないような人たちの声もちゃんと聞いて、広めたいというのがありますね。

— 選挙というのは政治と国民をまさにつなぐものかと思うんですけども、その選挙が国民のものになっているかどうかという点では、どうお感じになりますか。

アメリカとかだと、政治ネタがポリティカルジョークみたいな感じでいっぱいあるんですけど、あんまり日本ではないので。政治家の方もやっぱり分かりやすく伝えるという努力があまりにないので、どんどん離れていくかなという感じがありますよね。

— 大川さんは活動の幅がすごく広いと思うのですが、情報があふれている時代で、どういうところから情報収集をするのですか。

裁判所に行くのも、やっぱり事件の現場であったり、演説を聞きに行くのも選挙の現場であったりとか。例えば橋下市長なんかは、たぶん本人は気付いてないと思うんですが、テレビ的というかばんばん言っているというイメージがあるんですけど、普通の家庭の主婦の人が、保育問題の質問をすれば延々答えるんですよね。聞き上手であることをもっと前面に出せば、市民の方から立ち上がってもっと改革してくれたんじゃないかなという気がしますね。

— 様々な候補者の方を取材されていましたが、例えば支持政党なしという公約を掲げている方もいらっしやいましたね。

あれはよく思い付きましたね。北海道で10万票ですからね。社民と次世代の党を超えていますからね。

海外では海賊党という政党があって、間接民主主義と直接民主主義の間を取って、液体民主主義という表現を使って、自分の政策たちをネットで討論して、みんなで討論し終わった後、決まったらそれが党の政策になる団体もあるんですよ。

— 大川総裁としては、こんな政党があったら面白いとか、作ってみたいというアイデアはお持ちですか。

いやあ、そうですね。別に、何か日本国内じゃなくて世界に活動を向けただけの党とか、欲しいなというのは思いますがね。引きこもりの人たちが100万人といわれている中で、引きこもり党とか、選挙活動をネットでしかやらないけど当選するとか、そういう画期的なことが起きてほしいなとか思いますよね。少しでも日本を明るく楽しくできればなというふうに思っていますね。

— これからも世界中を見ていただいて、面白い政治に関する情報発信を我々は期待しています。

世界は恐ろしいですから、日本も負けないようにやらないと。僕なんかは橋下市長を見ていて、日本ではすごく暴れているように見えましたけど、世界的にいうとそうでもないなという感じですね。そういう意味ではちょっと今、日本の政治ってすごくドメスティックなので、もうちょっと世界に目を向けてもらいたいなという感じがありますね。

— 本日はどうもありがとうございました。

プロフィール おおかわ・ゆたか

大川興業総裁。1962年東京都生まれ。1983年、明治大学在学中に大川興業結成。1988年、自ら代表取締役となり大川興業株式会社を設立。日本三大総裁（日銀総裁、自民党総裁、大川総裁）の一人との声がある。北朝鮮やイラク、9.11直後のアメリカなどに出向き、現場主義をまっとうし、「日本のマイケル・ムーア」とも称される。舞台公演では脚本・演出もこなし、最近では「世界初の暗闇演劇」で演劇界に一石を投じている。

〈公演情報〉

2015年10月10日(土)~12日(月・祝) 下北沢ザ・スズナリ
大川興業第39回公演「The Light of Darkness」上演